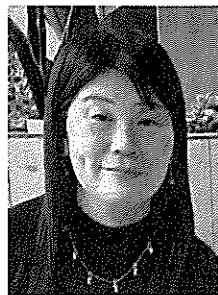


3枚で修行生活を

いろんな資料を分析すると、おそらく紀元前6世紀ごろ、お釈迦さまのインドで、「袈裟」は使用され始めたと考えられます。

インドでの袈裟は、特別な存在ではなく、ただ僧侶が着ている衣服を意味していました。僧侶は「三衣」という3



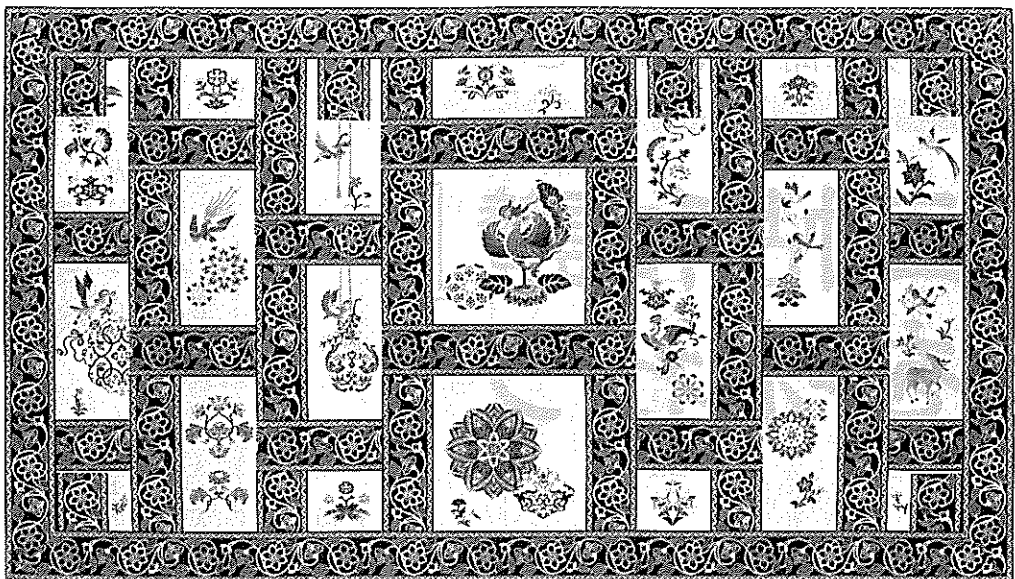
浄土を表す極上金襴で故人の葬儀を勤めたい

民俗学者

まつむら かおる こ
松村薫子

1972年生まれ。総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程満期退学。2004年同大学院から博士(学術)取得。2016年から大阪大学准教授。著書に『糞掃衣の研究』(法蔵館)など。

お袈裟の
ルール



長短の田んぼの形(田相)が横に七つ並んだ七条袈裟(写真提供:井筒法衣店)

ほど、やっぱり手間や時間がかかるので、それだけ高価になります。なので、執着心を起こさないように、布を切り刻んで価値をゼロにして、それを仕立てていくところに袈

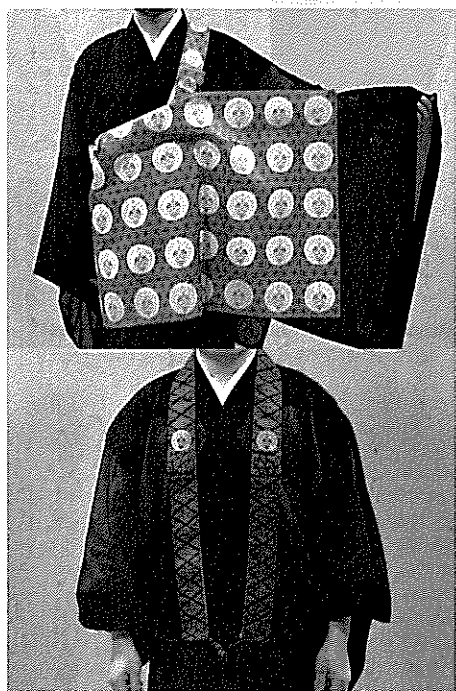
る色衣、黒衣、布袍などは、「法衣」と呼ばれています。それに対して、「袈裟」は、その上に着ける七条袈裟、五条袈裟、輪袈裟などを意味しています。

袈の意味があるのです。

南方へと仏教が伝わったミャンマーやタイでは、インドと同じような暖かい気候なので、伝統的な色や形状の袈裟が用いられました。

ところが、北方から中国に伝わると、寒い気候なので、当時の俗服であった着物を下に着て、さらに上に羽織るような着ける袈裟の形へと大きく変化しました。

中国を経て日本へ仏教が伝わりましたので、例えば、浄土真宗では、着物にあたる色衣、黒衣、布袍などは、「法衣」と呼ばれています。それに対して、「袈裟」は、その上に着ける七条袈裟、五条袈裟、輪袈裟などを意味しています。



法事などで用いる黒衣と五条袈裟(上)
日常で用いる布袍と輪袈裟(下)

枚の袈裟だけを所持することが許されていました。

作業用の衣である「安陀衣」は、スカートのように下半身に着ける衣です。インドは暑いので、掃除をするときなどに上半身は裸で、下半身だけに衣をつけていたようです。

「鬱多羅僧」は、寺院で礼拝をしたり、お経を読むときなどに、修行をするとき、上に着ていた衣です。

最後の「僧伽梨」は、フォーマルな公の場での儀礼など、さらにその上に着けていた大きな衣のことです。

この3枚があれば、僧侶として修行生活を営む上で、一応事が足りるということです。着る物に対する欲や執着を戒

しかも、中国に伝わると、当時の国の官職制度で、職階による服装の色分けがされていた。日本でも、聖徳太子が定めたといわれる「冠位十二階」は、十二階制の位冠を色によって定めています。そのような制度が、だんだん仏教の僧侶にも適応され、僧侶の位によって法衣や袈裟の色が変わるようになったのです。

目で見て感じたい

もう一つ、仏教では、僧侶の持ち物であった三衣と鉢で用いる鉢との「三衣一鉢」が師匠から弟子へ継承されたことから、法灯を継ぐことを、「衣鉢を継ぐ」と言い、師匠から弟子への伝法のシンボルとして、金糸で織った金襴袈裟が用いられました。

日本でも、鎌倉時代に、僧侶たちが中国の宋へ留学僧として渡り、その金襴の袈裟などを持ち帰ったのです。それがだんだんと広がり、江戸時代になると、特別な袈裟が一般化し、気づけば多くの僧侶が着けていました。随筆には、僧侶が金襴の袈裟を身に着け

めるために、最低限の3枚しか持たないように戒律で定められたわけですね。

そもそも、「袈裟」は、インドの言葉「カシャーヤ」を漢字にした言葉で、その意味は「赤褐色」という色を表していました。袈裟っていうのは、もともと色がすごく重要なんです。

修行者の僧侶は、衣服の色への執着をなくすために、俗服で好まれる奇麗な白、黒、赤、青、黄のような色を着てはいけないという規則が定められました。それで、「壊色」と呼ばれる赤褐色や、くすんだ青色、くすんだ黄色、濃い泥のような灰色に、染め直して袈裟を作りました。

て、まるで花嫁衣装のようなだと皮肉られています。

禅宗などでは、袈裟や戒律の復興運動として、インド以来の袈裟を作って広めようという運動も起きましたが、一方では、やはり金襴の袈裟が広まりながら、現代でも用いられています。

その理由には、まずご門徒さんの存在があります。自分のお寺の住職には、みずばらしい格好はしてほしくない、豪華な衣を着てほしいという思いがあります。

例えば葬儀のときに、くすんだ色の地味な袈裟ではなく、金襴の豪華な衣で葬儀を勤めてもらいたいというのです。その豪華な袈裟で葬儀を勤めてもらい、故人が西方の極楽浄土へ生まれていくことを喜ばれたのです。

昭和の時代は、豪華な宮殿型の霊きゅう車がはやりでしたが、あれも亡くなった人々を思う気持ちの表れです。浄土真宗でいえば、この袈裟世界では立派な家に住めなくても、最上の極楽世界に生まれていくことを表現しているといえます。亡くなった人々を見送る

インドのバラモン教では、カースト制の一番上の神に仕える宗教者たちは、血や糞尿がついた汚い衣服を嫌いました。仏教の袈裟は、「糞掃衣」とも呼ばれ、血や糞尿で汚れたり死人がつけていた布も使います。壊色に染めるという理由は、奇麗な布の色を壊しなさいということなんです。

位により変わる色

それと、デザインも欲にながるので、シンプルな田んぼの形が基本です。お釈迦さまが、田んぼを通りかかったときに、弟子の阿難に、あぜ道で区切られた田んぼの形で袈裟を作ってくださいと言われたことに由来します。

袈裟は、布を田んぼの1区画のような長方形の「田相」に切って、それを並べて、あぜ道にあたる「葉」でつなげて作ります。この縦の条数によって、五条袈裟、七条袈裟と大きさが異なります。

この袈裟の形は、切ることに意味があります。大きな織り機がないと、大きな布は織れません。大きければ大きい

遺族の思いによって、絢爛豪華な霊きゅう車になったのでしょう。金襴の袈裟と、まったく同じ論理なんです。

さらに言えば、浄土真宗の本堂の荘厳は、金箔や極彩色で、阿彌陀さまの極楽浄土の世界を表しています。極上の袈裟を着けることにより、その仏さまの荘厳世界を表しているとも言えます。それぞれの宗派によって袈裟の意味合い、味わいが違ってきます。

私も、実父が福井県の浄土真宗の門徒の生まれなんです。叔父の葬儀で、僧侶の金襴の袈裟を拝見し、研究を始めるきっかけになりました。

浄土真宗では、ご門徒さんがご覧になって、阿彌陀さまの極楽へ生まれていく相を感じ取り、極楽の世界を目で見て感じるところに意味があると思います。

秋は報恩講のシーズンです。最上の金襴袈裟を着けることによって、阿彌陀さまや観音さまへの感謝の思いを表されているのでしょうか。そんな伝統の思いが込められた袈裟の装いを、ぜひじっくりとご覧ください。

(談)